



Title	北欧神話文献データベースでの中動態の使われ方
Author(s)	堀井, 祐介
Citation	IDUN - 北欧研究 -. 2019, 23, p. 147-157
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71778
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

北欧神話文献データベースでの中動態の使われ方

堀井 祐介

1. はじめに

北欧地域に残されている神話的題材を扱った文献資料の中で、古西ノルド語で書かれている北欧神話分析の第一次資料とされる「エッダ詩集」、中世北欧を代表する文人であるスノッリ・ストゥルルソン (Snorri Sturluson, 1179-1241) の書いた「ギュルヴィの惑わし」(Gylfaginning)、「ユングリング・サガ」(Ynglingasaga) の三作品は顕著に神話的要素を含んでおり、他にこれらに匹敵するほどの北欧神話文献資料は見当たらない。

「エッダ詩集」とは、一つの作品集ではなく、類似の形式、内容を持つ韻文作品に対する総称である。言語的にはゲルマン語の一つである古西ノルド語で書かれており、年代的には紀元 10 世紀から 11 世紀を中心に書き記されたものが現在残されている。そのモチーフはすでに民族大移動のころ (紀元 2, 3 世紀頃) から存在していたものと考えられている。作品はその扱っている内容から大きく神話詩と英雄詩とに分けられる。韻律としては *málahátttr*, *fornyrðislag*, *líóðahátttr* で書かれており、Hildebrandslied, Beowulf, Heliand などの中世ゲルマン韻文作品と類似の韻律である。すべての作品が神々または伝説上の英雄を扱っており、特に神話詩は北欧神話の世界を描き出す第一の資料とされる。

次に、スノッリの作品「ギュルヴィの惑わし」、「ユングリング・サガ」について説明する。スノッリは、は 1179 (または 1178) 年にアイスランドの才知に長けた豪族ストゥルラ・ソールザルソン (Sturla Þórðarson, 1115-1183) の息子として生まれた。その後当時アイスランドにおける文化の中心であったオッディ (Oddi) において賢者セイムンドゥル (Sæmundr inn fróði, 1056-1133) の孫であるヨーン (Jón Loptsson, 1124-97) の養子として育てられた。成人してからは有力な豪族としてアイスランドで勢力を延ばした。彼は 2 度ノルウェー、スウェーデンに出向くが、ノルウェーの国内での争いに巻き込まれ、アイスランド国内でも闘争に明け暮れ、その立場は不安定なものになっていく。そしてついに 1241 年レイキャホルト (Reykjahlolt) の自宅で暗殺された。これらの政治的側面に加えて、彼は古ノルド文学において 3 つの重要な作品『エッダ』(Edda)、『ヘイムスクリングラ』(Heimskringla)、『聖オーラヴの物語』(Ólafs saga hins helga) を残している。

今回分析対象に加える「ギュルヴィの惑わし」、「ユングリング・サガ」は共に彼の作品であり、前者は『エッダ』の後者は『ヘイムスクリングラ』の一部である。『エッダ』は 1220 年頃に書かれたとされる古西ノルド語による韻文作品作成

の手引き書である。写本の一つに「この本はエッダと呼ばれる」とあるため『エッダ』の名がつけられているが、タイトルのエッダ (edda) という語については、何を意味しているのかはいろいろと説があり正確にはわかっていない。当時アイスランドでは古い詩芸（韻文作品をつくる際のさまざまな知識）が衰えており、これを憂慮したスノッリが古西ノルド語での詩芸を保存するためにこの本をまとめた。

『エッダ』は4部構成で「序」(Prologue), 「ギュルヴィの惑わし」(Gylfaginning), 「詩語法」(Skáldskaparmál), 「韻律一覧」(Háttatal) からなる。「序」において、スノッリは彼の学識と古代の神話を結びつけ、キリスト教の物語から始まり、アジアから古代の神々が北欧へ移動してきた話が続く、古代の神々を人間の王、英雄または魔法使いとみなすというユーヘメリズム的考えが見られる。「詩語法」では、古西ノルド語によく見られる言い換え表現 (heiti, kenning) について、つまり太陽や月などが人間、神々の世界でそれぞれどの様に呼ばれるのかについて述べられている。「韻律一覧」では100を超える例をあげて韻律について説明している。今回分析対象とする「ギュルヴィの惑わし」は「序」の流れを受けてスウェーデンの王ギュルヴィ (Gylfi) がアースガルド (Ásgarðr) に赴き、アース (Áss, Æsir アジアの人々) についての神話的物語を問答形式で尋ねるものである。その際にスノッリは「エッダ詩集」からモチーフとなる韻文を引用しそれを散文形式で語りなおしたりもしている。「ユングリング・サガ」は『ヘイムスクリングラ』の冒頭に出てくるサガで、1230年頃に書かれたとされる。『ヘイムスクリングラ』は古代から1177年までのノルウェー王たちが描かれている。その冒頭の「ユングリング・サガ」ではスウェーデンのユングリング王家の祖先について北欧神話の主要な神々と同じ名前で述べられている。それらの祖先は神話伝説上の存在である。

本稿では、これら三作品で用いられている動詞についてのデータベースから北欧語で特徴的な用法である「中動態」がどのように用いられているのかについて分析する。

2. 分析対象とする動詞データベース

本稿で分析対象とする動詞データベースは、以下の刊本¹に基づき、以下の手順により作成されている。

分析に使用する刊本

- Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte I. Völuspá, Hávamál*. København. Ejnar Munksgaard.
- Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte II. Gudedigte*. København. Ejnar Munksgaard.

¹ オリジナルの写本をわかりやすく活版印刷用アルファベットに文字おこしたもの。

- Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte III. Heltedigte første del*. København. Ejnar Munksgaard.
- Holtsmark, Anne, Helgason, Jón (udg.). 1976. *Sturluson Edda. Gylfaginning og prosafortellingene av Skáldskaparmál*. København. Ejnar Munksgaard.
- Wessén, Elias (udg.). 1952. *Snorri Sturluson Ynglingasaga*. København. Ejnar Munksgaard.

以上の刊本は、現在北欧において最も信頼のおけるものであるため今回の分析に用いた。上記の刊本に加えて、未刊の Eddadigte IV に入るべきエッダ英雄詩 11 作品を Jón Helgason 氏と共同で編集作業をされた Jónas Kristjánsson 氏の好意によりコピーを入手し今回の分析対象に加えた。

分析手順

- 1) 刊本に基づいて文献資料をテキストデータとしてコンピュータに入力。
- 2) テキストを MS-DOS のテキストファイルとして入力。
- 3) テキスト各行の先頭に位置情報として作品の略記号、節番号、行番号、韻文・散文の区別、(神話詩・英雄詩の区別)をつける。
例：VSP 3.6.VG GYLFG 24.45.P
- 4) テキストに出て来る古西ノルド語に特有のアルファベットは他の記号(¥verb/¥/, ¥%, ¥\$, @, ¥verb/^/)と組み合わせて入力する。
例：¥verb/¥/d, ¥% a, ¥\$ O, @o, ¥verb/^/E
(分析対象とする 3 作品(群)で約 17,000 行(約 650KB)となった。)
- 5) 入力したテキストデータのコンコーダンスを作成。
- 6) 入力した MS-DOS のテキストファイルを汎用機に転送し、KWIC コンコーダンス²を作成。
- 7) KWIC コンコーダンスをプリントアウトする。
- 8) コンコーダンスで動詞を調べる。
- 9) プリントアウトした KWIC コンコーダンスで辞書に基づき品詞をチェックする。
- 10) 元のテキストデータ上の動詞に印をつける。
- 11) KWIC コンコーダンス上で動詞とした単語について入力した MS-DOS テキストに印をつける。
- 12) データベースソフトに読み込めるようにテキストデータを加工。
- 13) エディターソフトのマクロ機能を用いて、*を付けた動詞、位置情報、前後

² Key Word in Context コンコーダンス。分析対象としたいキーワードの文脈上の位置(前後関係)がわかるように出力したコンコーダンス。

の文脈をデータベースソフトに読み込めるように加工。

- 14) 位置情報とその動詞、その動詞の出て来るテキスト行を持つデータベース作成。
- 15) データベースに主語、目的語、意味、時制など個々の動詞についての情報を資料に忠実に加えて全部で 38 のフィールドからなる動詞データベースを完成 (図 1 参照)。

ALLEDDA

WORD	treifaz	ENTRY	treifast	PLACE	TRK	1.8.VG	
COMBI	x	ADVERB	2	AUX_MAIN	m		
PHRASE	x						
MEANING	探す			M_CATEGORY	2		
FORM3	inf	TENSE	x	MOOD	x		
REF_FORM	refl	ENCLITIC	x	METER	x		
SUBJECT	larðdar burr			S_GRM	x		
S_REAL	ソール						
S_TYPE	n	S_CATEGORY	gma	S_PERSON	3	S_NUMBER	s
COMPLEMENT	x						
C_REAL	x						
C_TYPE	x	C_CATEGORY	x				
OBJECT	x						
O_REAL	x			O_TYPE	x		
O_CAT	x	O_PERSON	x	O_NUMBER	x	O_CASE	x
TEXT_2	sk@or nam at d'syia.						
TEXT_1	r'eðd larðdar burr						
TEXT	um at *treifaz.						
TEXT1							
TEXT2	Ok hann vtat orðda						

レコード: 170 / 15426 フィルター処理なし 検索

図 1

作成した動詞データは 15, 426 件となった。作品群別に見ると、「エッダ詩」神話詩 4133 件, 「エッダ詩」英雄詩 5145 件, 「ギルヴィの惑わし」3945 件, 「ユングリング・サガ」2203 件となっている (表 1 参照)。

表 1

	動詞データ総数	全体での比率(%)	
全体	15426	100	
「エッダ詩」全体	9278	60.15	「エッダ詩」での比率
「エッダ詩」神話詩	4133	26.79	44.55
「エッダ詩」英雄詩	5145	33.35	55.45
スノッリ作品全体	6148	39.85	スノッリ作品での比率
「ギルヴィの惑わし」	3945	25.57	64.17
「ユングリング・サガ」	2203	14.28	35.83

中動態の使われ方分析

A) 出現頻度

全動詞データ 15,426 件中, 中動態と分類されているのは表 2 にあるとおり 518 件 (3.36%) であった. 作品群別に見ると, 「エッダ詩」全体での動詞が全動詞データの 60.15% であるのに対して, 中動態における「エッダ詩」全体の比率は 53.09% と低くなっている. それに応じるように, スノッリの 2 作品は全体に占める比率が 39.85% であるのに中動態における比率は 46.91% と高くなっている. なかでも「エッダ詩」神話詩での比率が低く, 「ギルヴィの惑わし」で比率が高い. このことは「エッダ詩」がほぼ韻文であるのに対し, スノッリの 2 作品がほぼ散文で構成されていることと関係があると思われる.

表 2

	動詞データ 総数	全体で の比率 (%)	中動態 動詞の 数	全体での 比率(%)	中動態動 詞518件 の分布比 率(%)
全体	15426	100	518	3.36	100
「エッダ詩」全体	9278	60.15	275	1.78	53.09
「エッダ詩」神話詩	4133	26.79	105	0.68	20.27
「エッダ詩」英雄詩	5145	33.35	170	1.1	32.82
スノッリ作品全体	6148	39.85	243	1.58	46.91
「ギルヴィの惑わし」	3945	25.57	169	1.1	32.63
「ユングリング・サガ」	2203	14.28	74	0.48	14.29

B) 用法別

本動詞データベース作成にあたり、中動態を再帰／相互／起動（新しい状態に入る、なる）／受け身の4つの用法に分類した。全体518件のうち再帰が380件（73.36%）、相互が89件（17.18%）、起動が20件（3.86%）、受け身が29件（5.6%）となった。作品群別および韻文／散文別に見てみる。

表 3

中動態 用法別	「エッダ詩」全体							
	出現数	比率 (%)	全体での 出現数	比率 (%)	韻文での 出現数	比率 (%)	散文での 出現数	比率 (%)
再帰	380	73.36	189	68.73	170	68.27	19	73.08
相互	89	17.18	53	19.27	49	19.68	4	15.38
起動	20	3.86	11	4	11	4.42	0	0
受け身	29	5.6	22	8	19	7.63	3	11.54
	518		275		249		26	

表 4

中動態 用法別	「エッダ詩」神話詩							
	出現数	比率 (%)	全体での 出現数	比率 (%)	韻文での 出現数	比率 (%)	散文での 出現数	比率 (%)
再帰	380	73.36	69	65.71	64	64	5	100
相互	89	17.18	24	22.86	24	24	0	0
起動	20	3.86	5	4.76	5	5	0	0
受け身	29	5.6	7	6.67	7	7	0	0
	518		105		100		5	

表 5

中動態 用法別	「エッダ詩」英雄詩							
	出現数	比率 (%)	全体での 出現数	比率 (%)	韻文での 出現数	比率 (%)	散文での 出現数	比率 (%)
再帰	380	73.36	120	70.59	106	71.14	14	66.67
相互	89	17.18	29	17.06	25	16.78	4	19.05
起動	20	3.86	6	3.53	6	4.03	0	0
受け身	29	5.6	15	8.82	12	8.05	3	14.29
	518		170		149		21	

表 6

中動態 用法別	スノッリ作品全体							
	出現数	比率 (%)	全体での 出現数	比率 (%)	韻文での 出現数	比率 (%)	散文での 出現数	比率 (%)
再帰	380	73.36	191	78.6	6	35.29	185	81.86
相互	89	17.18	36	14.81	7	41.18	29	12.83
起動	20	3.86	9	3.7	1	5.88	8	3.54
受け身	29	5.6	7	2.88	3	17.65	4	1.77
	518		243		17		226	

表 7

中動態 用法別	出現数	比率 (%)	「ギルヴァイの惑わし」					
			全体での 出現数	比率 (%)	韻文での 出現数	比率 (%)	散文での 出現数	比率 (%)
再帰	380	73.36	139	82.25	6	40	133	86.36
相互	89	17.18	23	13.61	5	33.33	18	11.69
起動	20	3.86	3	1.78	1	6.67	2	1.3
受け身	29	5.6	4	2.37	3	20	1	0.65
	518		169		15		154	

表 8

中動態 用法別	出現数	比率 (%)	「ユングリンガ・サガ」					
			全体での 出現数	比率 (%)	韻文での 出現数	比率 (%)	散文での 出現数	比率 (%)
再帰	380	73.36	52	70.27	0	0	52	72.22
相互	89	17.18	13	17.57	2	100	11	15.28
起動	20	3.86	6	8.11	0	0	6	8.33
受け身	29	5.6	3	4.05	0	0	3	4.17
	518		74		2		72	

表3から表8を見てわかるように、再帰での用法がどの作品群においても非常に高い数値となっている。なかでも「ギルヴァイの惑わし」(表7参照)で比率が特に高い。一方、「エッダ詩」神話詩(表4参照)での比率は全体と比べて低く、A)で述べた中動態出現頻度と同じ傾向となっている。

C) 主語カテゴリー別

本動詞データベースでは、動詞の主語について、意味上の主語、その実態、タイプ(主格位置にある、目的格位置にある、など)、実態をカテゴリー別に分類、主語の人称、単数・複数の別について項目を設けている。ここでは、その中から中動態動詞の主語のカテゴリー別分類について調べてみる。カテゴリー分類は多岐にわたるが、ここでは代表的な登場人物となる、神々、英雄、巨人、人(王を含む)、および、特徴的な数値が出た超存在(巫女など)についてのみ紹介する。

表 9

主語カテゴリー別 分類	中動態 (518件)		全体 (15,426件)	
	出現数	比率 (%)	出現数	比率 (%)
神々	116	22.39	3032	19.66
英雄	102	19.69	3268	21.19
巨人	30	5.79	836	5.42
人(王を含む)	96	18.53	2654	17.2
超存在(巫女など)	5	0.97	378	2.45

表9にあるように、全体と比べて神々に使われる比率が少し高く、英雄に使われる比率が少し低い傾向が見られる。数は少ないが、超存在に対して中動態が用いられている比率は全体と比べてかなり低くなっている。

D) 主語人称別

次に、動詞の主語の人称、単数・複数別についてみる。主語が明示されておらず文脈からも不明なものもあるが、それらを除いた数値で見ると、人称については、全動詞データと比べて中動態の方が1人称、2人称が少なく3人称が多い（表10参照）。

表 10

主語 人称別	中動態（518件）		全体（15,426件）	
	出現数	比率(%)	出現数	比率(%)
1人称	46	8.88	1735	11.25
2人称	35	6.76	1755	11.38
3人称	436	84.17	11883	77.03
不明	1	0.19	53	0.34

E) 主語単数・複数別

主語の単数・複数においては、全動詞データと比べて中動態では複数形の比率が高くなっていることがわかる（表11参照）。これは、中動態の主たる用法として複数主語を前提とする「相互」があるためと考えられる。

表 11

主語 単・複数	中動態（518件）		全体（15,426件）	
	出現数	比率(%)	出現数	比率(%)
単数	341	65.83	12078	78.3
複数	176	33.98	3253	21.09
不明	1	0.19	95	0.62

F) 固有性

最後に、その固有性について見てみる。ここでの固有性とは、その動詞の見出し語、意味、主語の組み合わせが、今回分析対象とした作品群において固有のものを指す。つまり、その動詞が、その意味では、特定の主語とのみ結びついているものである。中動態の動詞で見るとその数は518件中194件（37.45%）

となり、全動詞データベースにおける 15,426 件中 2,276 件 (14.75%) よりかなり高い比率となっている。このことは、中動態が古西ノルド語において特徴的な用法であるため、今回分析対象とした作品群において見出し語 (動詞)、意味、主語の組み合わせで固有に用いられている比率が高くなった可能性が考えられる。

表 12

見出し語、意味、 主語の組み合わせ	中動態 (518件)		全体 (15,426件)	
	出現数	比率 (%)	出現数	比率 (%)
固有	194	37.45	2276	14.75

まとめ

以上、非常に簡単ではあるが、古西ノルド語で書かれた北欧神話文献資料における中動態の使われ方について見てきた。全動詞データ 15,426 件中、中動態は 518 件と非常に少ないが、作品群別出現数、用法別、主語カテゴリー別、主語人称別、主語単数・複数別、固有性についていくつか傾向が把握できた。作品群別では「エッタ詩」神話詩で中動態の出現比率が低く、「ギュルヴィの惑わし」で高いことがわかった。用法別では、再帰用法が 380 件 (73.36%) と圧倒的多数を占めており、また、「ギュルヴィの惑わし」では他の用法に比べて特に高い比率で再帰用法が用いられていることがわかった。主語カテゴリー別では、神々、英雄、巨人などの主要登場人物別の中動態出現率は、全動詞データと比べて特に大きな差は無いが、それらとは別の巫女などの超存在に対して中動態が用いられている比率は全体と比べてかなり低くなっていることが明らかになった。主語の人称別では、中動態に対しては 3 人称が高く、1 人称、2 人称が低くなっている。主語の単数・複数別では、中動態に対して複数主語が全動詞データと比べて高い比率で用いられること示された。これは、中動態の「相互」用法に起因するものと考えられる。最後に、今回分析対象とした作品群では、中動態における見出し語 (動詞)、意味、主語の組み合わせの固有性が全動詞データと比較して高い比率であることも明らかになった。このことは、ゲルマン語の一派である北欧語において特徴的な用法である「中動態」が古西ノルド語で書かれた神話資料においても特定の場面で使われていたことを示唆しているのではないだろうか。

Brugen af medium i urnordiske mytologiske tekster

Yusuke Horii

Resumé

Denne artikel handler om brugen af medium i urnordiske mytologiske tekster: Eddadigte, Gylfaginning og Ynglingasaga af Snorri Sturluson. Disse tekster indeholder mange sager om nordisk mytologi og har en førsteklases kvalitet i videnskabelig undersøgelse af nordisk mytologi. Medium er en typisk grammatisk form i nordiske sprog med lang tradition fra urnordisk. Baseret på en database af verberne fra disse tekster, skal brugen af medium undersøges. Databasen består af 15,426 verber med 38 datafelter. Blandt 15,426 verber findes der 518 medium-verber. Disse medium verber i databasen viser nogle undersøgelsesresultater.

Fremkomsternes hyppighed veksler mellem teksterne. I Snorres 2 tekster findes der højere hyppighed af medium i forhold til Eddadigte. Især har Gudedigtet i Eddadigte mindre hyppighed end Gylfaginning. Hovedsageligt er Eddadigte i vers stil og Snorres tekster i prosa stil. Denne stilforskel mellem vers og prosa kan godt være en årsag.

Medium har fire forskellige sprogbrug: reflektiv, reciprok, inkoativ og passiv. De fleste af medium (380, 73.36%) bruges som reflektiv. I Gylfaginning er der jo højere procent af sprogbrug af reflektiv (82.25%).

Hvad angår subjekt, findes der ikke så speciele undersøgelsesresultater blandt guderne, heltene og jætterne undtagen at overnaturlige eksistenser som spåkoner findes på meget lavt niveau med medium. Tredje person bruges oftere end både første og anden i forhold til hele databasen. Og flertal bruges oftere end ental. Medium med reciprok sprogbrug kan godt påvirke dette.

Der findes også høj entydighed i kombinationen med opslagsord, betydning og subjekt i brugen af medium. Blandt 15,426 verber er der 2,276 verber (14.75%) som kan have entydighed i disse undersøgte tekster, men i medium findes der 194 verber (37.45%), som har entydighed mellem 518 verber.

参考文献

- 森田貞雄. 1981. 『アイスランド語文法』. 東京. 大学書林.
- Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte I. Völuspá, Hávamál*. København. Ejnar Munksgaard.
- Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte II. Gudedigte*. København. Ejnar Munksgaard.
- Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte III. Heltedigte første del*. København. Ejnar Munksgaard.
- Holtsmark, Anne, Helgason, Jón (udg.). 1976. *Sturluson Edda. Gylfaginning og prosafortellingene av Skáldskaparmál*. København. Ejnar Munksgaard.
- Wessén, Elias (udg.). 1952. *Snorri Sturluson Ynglingasaga*. København. Ejnar Munksgaard.
- Andersen, Harry. 1936. *Oldnordisk Grammatik. Lydlære, Formlære, Hovedpunkter af Syntaksen*. København. J. H. Schultz Forlag.
- Hanssen, Eskil, Mundal, Else, Skadberg, Køre. 1975. *Norrøn grammatikk. Lydlære, formlære og syntaks i historisk framstilling*. Oslo. Universitetsforlaget.
- Iversen, Ragnvald. 1984. *Norrøn grammatikk*. Aschehoug.
- Lund, G. F. V.. 1862. *Oldnordisk Ordføjningslære*. København. Berlingske Bogtrykkeri.
- Nygaard, M.. 1966. *Norrøn Syntax*. Oslo. Aschehoug.